



とやまの普及活動

普及事業の紹介

目的

普及事業は、都道府県の専門職員（普及指導員）が、農業者に対して、生産性や作物品質の向上のための技術や、効率的・安定的な農業経営のためのノウハウ等について、支援・指導する事業です。

活動体制

【農林振興センター】

農林振興センターでは、企画振興課、担い手支援課及び農業普及課に普及指導員が配置されており、農業者の多様なニーズに対応し、地域農業を総合的に振興するため、各課が連携して専門的な指導を行っています。

【広域普及指導センター】

広域普及指導センターは、主穀作・園芸及び畜産に係る技術対策の中核機能を担い、県内横断的な課題や最新技術の現地適性、畜産等に係る専門的で高度な普及指導活動を行っています。

名称	所在地
新川農林振興センター黒部庁舎	黒部市荻生3200
富山農林振興センター諏訪川原庁舎	富山市諏訪川原1-3-22
高岡農林振興センター	高岡市赤祖父211（高岡総合庁舎2F）
砺波農林振興センター	砺波市幸町1-7（砺波総合庁舎3F）
広域普及指導センター（農業革新支援センター）	富山市吉岡1124-1

普及活動の課題

1 農業経営の高度化・複合化と

- (1) 次代に向けた地域営農体制の構築
- (2) 担い手の経営力向上と基盤強化
- (3) スマート農業技術等の活用と新たな生産方式の導入
- (4) 地域を支える多様な担い手の育成・確保
- (5) 高温等気象変動への適応と自然災害への対応の促進

2 消費者に求められる競争力のある農産物の生産

- (1) 高品質で選ばれる富山米の生産の推進
- (2) 水田フル活用等による大豆・大麦等の生産の推進
- (3) 園芸作物の生産力の強化・拡大
- (4) 安全で高品質な畜産物の低コスト生産の推進
- (5) 人と環境にやさしい農業の普及拡大

3 農畜産物のブランド力向上と販路の開拓・拡大

- (1) 6次産業化の推進
- (2) 農畜産物のブランド力の向上
- (3) 地産地消と食育の推進

4 豊かな資源を活用した魅力ある農村の創造

- (1) 地域資源を活用した農山村の活性化
- (2) 鳥獣被害防止対策の推進と中山間地域等の活性化



令和8年3月

富山市新保地区の種もみ安定供給 ～新たな風（担い手・技術）で産地を活性化～

富山農林振興センター

背景

全国一の種もみ出荷県である本県において、富山市農協新保採種部会（富山市新保地区）は水稻種子23品種・約160haを生産し、県下2番目の産地規模を誇る。

近年、種子生産者の高齢化・リタイヤが加速し産地縮小が危ぶまれること、また種子契約数量を安定的に確保できていない問題があることから、将来にわたり全国へ種もみを安定供給するために「担い手育成」と「優良種子生産」の課題に取り組んだ。

農業者への支援

1 担い手育成

(1) 新規生産者の確保

先輩種子農家での研修や種子生産プレテストなどによる技術習得を経て、3年目に種子で経営開始するスキームを構築し就農までを支援（図1）

(2) 既存経営体の強化

ア 法人化研修会の開催や税理士を含めた支援チームによる伴走支援

イ 代替わりした若手生産者や新規雇用の従業員を対象とした栽培管理研修会の開催

2 優良種子生産

(1) 収量の向上

多様化する契約品種の生育を把握するためJAと生育調査を実施

個別指導の強化と併せて品種の特性表を更新することで、データを蓄積し生産者が代わっても安定的に収量を確保する環境を整備

(2) 異茎・病害株の発生低減

ア 「種もみクリーン原種供給センター」によるクリーニング効果の現地実証試験

イ 有機物を含む軽量培土推進（写真）やもみ枯細菌病簡易診断キットの活用による病害抑制



図1 新規就農のスキーム



写真 稲の見方勉強会

活動の成果

1 担い手育成

(1) 50代以下生産者の面積シェアが産地の約半分まで拡大し、生産構造の若返りが実現（図2）

(2) 3法人が新規設立。順調に規模を拡大するとともに、研修生の受け入れや20代の農家子弟が就農するなど、若手が活躍する場となっている

2 優良種子生産

(1) 異茎・病害株の発生低減による省力化や生産者の収量向上により、令和7年産種子において契約数量を達成した品種が大きく増加（図3）



図2 年代別の作付面積

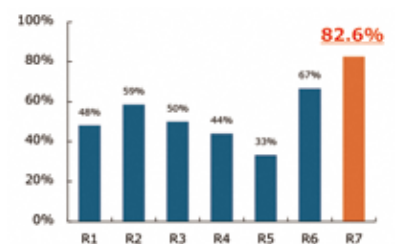


図3 契約達成品種率の推移

今後の取組み

- 1 更なる生産者確保に向け「産地提案書」を活用した能動的な生産者の掘り起こし
- 2 既存経営体の規模拡大や法人化、従業員雇用等の伴走支援
- 3 新しい技術・研究成果を積極的に現場へ導入し種子生産の効率化を促進

猛暑下での美味しい富山米の生産に向けて

～人・環境・技術のコンダクト～

新川農林振興センター

背景

近年、高温の影響で発生する「白未熟粒」の抑制に向け「穂揃期葉色の確保」を指導しており、その対策の一つが追肥対応である。しかし、肥効調節型肥料の活用により省力化を図ってきた大規模経営体では、労力的に追肥が困難となっている。また猛暑となった5年産コシヒカリでは出穂前の追肥を実施しても、白未熟粒が多発した経営体が多く、新たな対策が求められていた。以上を踏まえ、魚津市・黒部市の地域技術者協議会（以下、「技協」）の機能を活かし、高温下における産米品質の安定化に向け、①栽培技術の再構築、②高温耐性品種「富富富」の生産拡大に取り組んだ。

農業者への支援

1 「技協」を主体とした指導体制の確立

(1) 技協による次年度方針の策定と指導手法の検討

各技協での「稲作反省」により、各地域の課題を明確化するとともに、農業者の気質や地域環境に応じた対策へアレンジし、JA・市と課題の共有化を図っている。

(2) 指導レベルのボトムアップ

若手の営農指導員、普及指導員・技師に対し随時、勉強会やOJT研修を通じて技術レベルを底上げしている。

(3) 各技協の特性に応じたコンダクト

2 地域の特性に応じた「技術実証試験」などの実施

3 高温耐性品種「富富富」の新規導入に向けた、ターゲットの設定とフォロー体制の整備

各経営体に詳しい営農指導員が主体となり富富富の導入を進め、栽培管理指導は当センターが主体となり、「栽培研修会」や「一人一筆ほの設置」によりフォローアップを行い、生産意欲の向上に努めている。



写真1 富富富栽培研修



写真2 稲の見方勉強会

活動の成果

1 具体的な手法の伝達による白未熟粒の発生低減

“7月からのヒタヒタ水”作戦により、「出穂1週間前の葉色4.0」未達割合は10%前後から3%程度へ減少し、「穂揃期葉色」も確保した。

2 富富富の面積の増加による産米品質低下の抑制

特に魚津市で作付面積が順調に拡大し、両市で単収が改善している(図)。さらに、うるち米における白未熟粒による格落ちが大きく減少した。指導者も経験を重ね、スキルアップにつながった。

3 魚津市でも「土づくり助成」を開始

黒部市の土づくり助成の取組みを参考に、魚津市に土づくり制度が新設され、普及が図られた。

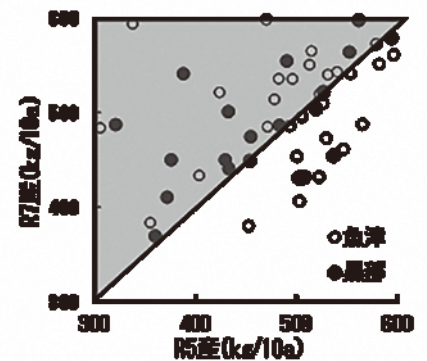


図 富富富の単収の変化
※R5とR7の比較

今後の取組み

- ・カメムシによる斑点米対策の確立
- ・持続可能な農業への対応
- ・各地域の技術の底上げ
- ・普及組織全体の連携強化
- ・地域の人材育成などの体制の整備

経営体との双方向伝達看板による栽培管理の意識改革

～県内トップの酒米産地で収量アップ！アナログ大作戦！！～

砺波農林振興センター

背景

J Aなんと管内は、酒造好適米の作付面積は381haと、県内作付面積の53%を占める県内トップの産地であり、毎年1等米比率が高く、心白発現率も高い水準にある。

しかし、中干し後の強い田干しや入水不足等で、年次により380～440kg/10aと不安定で低収なことから、主力の五百万石を中心とした酒造好適米の高位安定生産を目指すため、主な生産者である集落営農組織を対象に、「中干し以降を中心とした水管理の適正化」を重点技術対策として、その指導を徹底していくこととした。

農業者への支援

1 【平成26年～】電子メールでの伝達体制の構築

気象情報等の伝達から開始し、順次、栽培管理（水管理、中干し、穂肥等）を追加

2 【令和元年～】水管理を中心とした「営農連絡メモ」をほ場に設置

大勢の人に見てもらえ、視覚的にも伝達できる方法として、水管理（田植当初の浅水管理、中干し、出穂後の湛水管理等）やほ場を見て気付いたことをメモ書きで掲示

3 【令和6年～】指示事項及び実施状況が双方向で伝達できる水管理看板の設置

普及指導員と組織間で水管理の認識が共有化できるよう、「双方が見える」新たな看板に変更

(1) ほ場管理者が、稲の生育に合わせて、水管理状況を記入して入れ替え（写真上部：①）

(2) 水管理スケジュールの目安を掲示（写真中央部：②）

(3) 品種・栽培様式・栽培者を掲示（写真下部：③）

👉 看板を見た人が、掲示内容を参考にほ場の水管理を行うよう誘導



写真 双方向伝達用
水管理看板

活動の成果

1 適正な水管理による五百万石の単収増加

水管理看板を設置した組織のうち、中干し以降の水管理を適正に行った組織では、設置前に比べ単収が向上（図）

2 組織における水管理方法の意識変化

(1) 「集落のみんなが看板を参考に水管理している」との声が聞かれる等、中干し後の水管理について管理内容を共有化

(2) 指導員とのやり取りが、収穫期まで実施された組織では、水管理への認識が向上

(3) 単収が向上した組織では、水管理の重要性を認識

👉 構成員の水管理に係る意識向上を実感

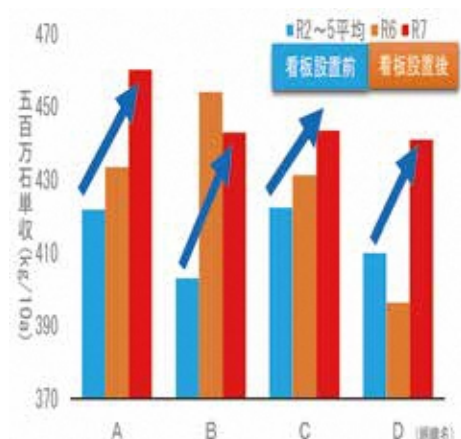


図 水管理が適切な組織での
五百万石の単収推移

今後の取組み

1 水管理看板のバージョンアップの実施

2 水管理看板の継続に加え、自動給水栓の活用を促す等、アナログとデジタルの融合で、より適正な水管理が実践され、酒造好適米の収量向上が図られるよう指導

青年農業者協議会の活性化と認定新規就農者育成支援

～普及が創る成長の場～

高岡農林振興センター

背景

氷見市・射水市・高岡市の青年農業者を会員とする「氷見射水高岡地区青年農業者協議会」は、会員相互の連携協調を図り自主的な活動を促進し、農業技術及び農業経営力の向上並びに地域農業振興に貢献することを目的に活動を展開している。

会員数の減少と活動停滞が課題となっている中、協議会の活動強化を目的に、新規会員確保と経営者育成の場として会員が関心を持ち活発な協議会運営に取り組めるよう様々な支援を行った。

農業者への支援

- 1 新規会員の加入促進
 - ・①当振興センターHPに協議会活動紹介のページ開設、②加入申込書の作成、③グループLINEの活用
- 2 協議会活動を活性化させるため一体感を醸成するための取組・工夫
 - ・LINEを活用した情報共有
 - ・会員の経営上の共通課題を意識したプロジェクト活動の展開
- 3 地域貢献活動の新たな実施
 - ・地域ボランティア活動の実施
 - ・農業祭・フェア等地域イベントへの参加支援
- 4 経営発展に資する研修会の開催
 - ・補助事業や経営発展に関する研修会の企画及び開催
- 5 基金事業・補助事業の活用支援
 - ・サポート体制を構築し、制度に関する情報共有



写真1 定例会の様子

活動の成果

- 1 新規会員の確保
 - ・新規会員を2年間で13名確保
 - ・各市に副会長を配置する組織改革を実施
- 2 協議会活動を活性化させ一体感を醸成できた
 - ・市や作目の垣根が低くなり、仲間意識が醸成された
 - ・経営者間の交流による新たなビジネス展開が生まれた
- 3 販売を意識した生産活動の実施
 - ・地域イベントへの参加が定着
 - ・自らの農産物を直接販売する機会の創出
- 4 農業経営に目を向ける機会の創出
 - ・会員からテーマを吸い上げ、集約し研修会を実施
- 5 補助事業に関するサポート体制の構築
 - ・情報提供により基金事業や各種補助事業の活用、各種計画策定を支援

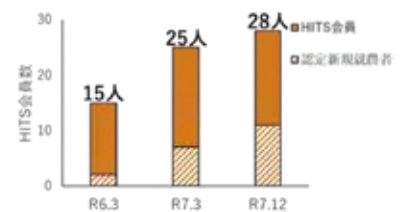


図 HITS会員の推移



写真2 農業祭の様子

今後の取組み

年間120人の新規就農者の確保が県の目標となる中、今後、ますます新規就農者の定着・発展支援が重要となってくる。

事務局と協議会が育成目標・姿を明確化するとともに、認定新規就農者の育成の場として協議会活動支援を普及指導計画に位置づけし、総力をあげて活動支援を実施する。

県産ぶどうの生産振興プロジェクト

～他県に負けない『房』生産を目指した5年間の軌跡～

広域普及指導センター

背景

近年、県内では若手生産者や既存果樹（梨）農家が新たにぶどうを導入する事例がみられているが、主要品種「シャインマスカット」では果粒が小さい等の課題があり、生産現場からは早期の改善技術の開発が求められていた。

そこで、関係機関で構成されたプロジェクトチームを設立し、技術開発と開発した技術の普及による新規経営体の支援を実施し、優良経営体の育成を図った。

農業者への支援

1 技術開発（令和3～7年）

課題解決に向け、新梢管理方法の実証と県内5～6園地の実態調査を実施し、その結果、大粒生産に必要な生育期の葉色の基準を明らかにした（図1）。さらに、植物成長調整剤「フラスター液剤」の使用による房形向上効果を確認した。

2 開発した技術の普及（令和3～7年）

「ぶどう技術向上及び導入推進研修会」を開催するとともに、栽培マニュアルを作成・配布し、開発した技術を提示することで、新規経営体の技術向上支援に加え、新たなぶどう生産者の発掘を行った。

3 販売支援（令和6～7年）

新たな販路の確保に向け、市場等への出荷意向のある経営体と県内量販店や果物専門店とのマッチング支援を実施した。また、県産「シャインマスカット」のブランド力向上に向け、「県産ぶどうフェア」の開催とオンラインショップでの販売を実施した。

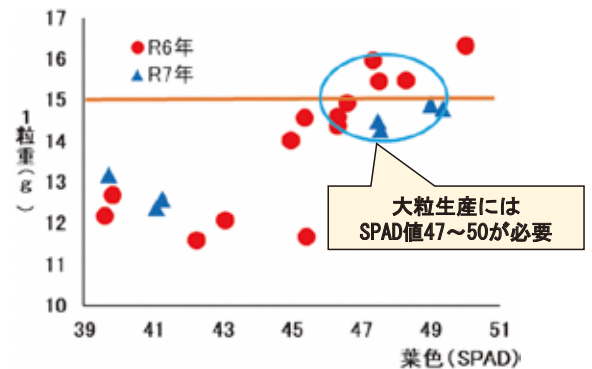


図1 葉色と1粒重の関係

活動の成果

大粒ですき間のない外観良好な『房』（写真）の生産と高品質なぶどうを複数販路での販売が可能となった。

その結果、新規経営体の規模拡大に加え、新たにぶどうを導入する経営体が見られたことから、令和7年には、これら経営体の栽培面積は7.3ha、出荷量は27.9tまで拡大した（図2）。

さらに、1kg当たりの販売単価が2,050円まで向上し、10a当たりの販売金額が100万円を超える経営体が8戸誕生した。



写真 大粒で外観良好な「シャインマスカット」

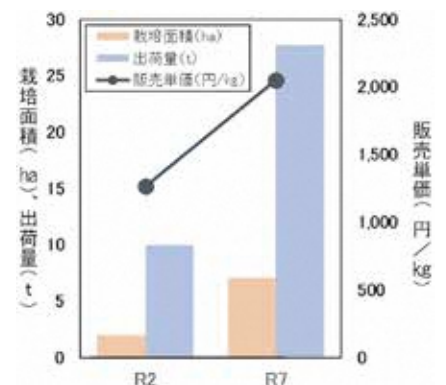


図2 新規経営体の栽培面積及び出荷量、販売単価の推移

今後の取組み

プロジェクトチームを核とし、優良経営体の育成支援の継続に加え、開発した技術の波及により、既存生産出荷組織の生産性向上による活性化を図る。